ikeco（イケコ）

2023
Vol.40
新年号

“住む人が主役の家づくり”に、もっとファンを！

体感を通じて伝える
“外と内がつながる
理想の住まいづくり”

日本の伝統構法と新素材を
融合させ未来の家をつくる

設計監理：鳥取県大山町　株式会社 創伸

体感を通じて伝える“外と内がつながる理想の住まいづくり”

日本の伝統構法と新素材を融合させ未来の家をつくる

株式会社　創伸
代表取締役　北村 裕寿

地域風土にふさわしい理想的な住宅の温熱環境を追求し、高水準の施工技術や素材の選択に改良を重ね続ける鳥取県大山町にある地域工務店のトップランナー・株式会社創伸の北村裕寿さんにお話を伺いました。

いちばん重要なのは「木」

株式会社創伸での家づくりにおいて一番重要なのは「木」。同社が位置するのは山陰の中でも日本海から標高の高い大山山頂までを含み、はっきりとした四季の移り変わりが感じられ美しい風景を楽しめる土地だ。しかし、夏は蒸し暑く冬には豪雪になり、年間の日照時間は隣接する岡山県の約80％で降水量に至っては約170％となる(*1)。

その土地で新築住宅だけでなく大規模な古民家再生を手掛けている同社では、自社で地場材を製材。技術の確かな大工と一緒に、中間コストをなるべく抑え出所が明確で品質の高い木材を用いた家づくりを可能にしてきた。

「私たちの家づくりにとって一番重要なのは木です。木の持っている役割を最大限に引き出して建築に表現することで、耐久性や居心地の良さも含めてお客さまへ安心安全な住まいを提供できると考えています。単に木といっても仕上げに用いられるものや下地となるものがありますが、基本的には外も中も化学物質が含まれた建材は使わず、ちゃんと家の外と中がつながるということを意識して建てています」と、奈良県で宮大工の修行経験もある北村さん。〝化学物質を使わない家づくり〟をすすめる中で、断熱材だけは化学合成品を使わざるを得ないことに違和感を感じていたこともあり、木繊維断熱材との出会いによって「腑に落ちた」という。

「木が呼吸できる住まい環境」を作ることで、住む人もちゃんと鼻と口で呼吸するだけでなく、家全体が呼吸して室内の空気質の良さが感じられる建築を理想とする。そして、その理想は断熱に吹き込み式である木繊維断熱材シュタイコゼルを採用する理由とも一致する。

そもそも木繊維断熱材を採用するに至ったのは、化学物質を一切使わず建物を造ってほしいという強い要望の施主が現れたことにある。

「木で建てた家との相性が良く、木繊維断熱材がとてもいいものだとお客様も現場の私たちも肌で実感できたのですが、初めての施工で古民家の大規模改修だったこともあり予想以上に手間と人件費が掛かりました。お客様に引き渡した後の満足度はすごく高かったのですが、そのコストを実感したときに確かに商品としてはとてもいいが、果たしてこれは幅広く使える断熱なのか…と難しく思っていたのも事実です」と北村さん。

懸念されたコストと施工の重要性

北村さんの断熱に対する暗中模索は続き、再び転機が訪れたのは2020年の暮れの佐藤氏（秋田／有限会社もるくす建築社）との電話だった。

「結局、どの材料を使おうとも手間が掛かる断熱について悩んでいることを佐藤さんに話しました。その頃には既に、ブローイング（吹き込み工法）でできるものが良いと考えていました。特に天井には手間もかからず効率よく吹けるので、施工の安定性以外にもコスト的な魅力も感じていました。自分でも木繊維断熱材以外にグラスウールのブローイングをしている外注業者や機械を探していたところでした」

そこで、佐藤氏からは木繊維断熱材の中でも吹き込み工法であるシュタイコゼルを提案された。当時、国内では木繊維断熱材といえば充填工法の存在しか知られておらず、吹き込み工法でできることにとても驚き可能性を感じたという。

「私たちは製材から家具の造作まで自社で行い、自分たちで責任を持って提供できる施工の幅が広い方だと思っています。自社の職人でシュタイコゼルを吹き込もうと決断する際に、協力業者に外注で出すということも確かに効率が良く効果的だと思いました。しかし、自社施工にすることで何かしら断熱に対する考え方や施工性の幅が広がるのではという期待感もあったんです」

実際に新しく導入した海外製のブローイングマシンの操作性は複雑ではなく、吹き込みには徐々に慣れ問題なく施工できるようになった。自社で原木を仕入れて製材し家づくりに用いるということを実際に行ってきたからこそ、次世代の断熱材であるシュタイコを採用し自社施工に積極的に挑戦できたと北村さんは振り返る。

「製材を自社で行ってきたことで製材所プラスアルファの方法論や技術を会得し、製材所任せでは表現できなかった木取りとか使い方が自ずと生まれてきました。私たちが身をもってした経験から、自社施工で行う吹き込み断熱にも同じように仕事の幅を広げる可能性があると思いました」

大規模な古民家改修を手掛けることも多く、断熱や製材に限らず外注業者に頼むことでスケジュールや品質管理の難しさを痛感していた。自社での進行管理ができないと工事現場が手待ちになることや、外注先の遅れにより自社の大工が徹夜作業になることも。自社で補える範囲を増やし全て管理できるようになることで、現場の進行速度や自由度が大きく向上しているという。

体感を通じて伝える

創伸では新築の場合、性能面ではUA値が0.4前後、ウルト社の透湿防水シートで外側の気密をとりC値は0.2前後といった数値が標準となる。天井にはシュタイコゼルを350㎜、壁には120㎜を柱間に吹き込んで、窓は複層ガラスの樹脂サッシの仕様だ。鳥取県では戸建て住宅を新築する際に断熱を強化することで取得できる県独自の補助金などもあり、住宅の性能数値について関心を持つ施主も少なくない。(*2)

ドイツ製のブロワーでシュタイコゼルを吹き込む

シュタイコの採用は、断熱についてさまざまな試行錯誤を重ねてようやく辿り着いた結論だが、断熱や気密などの家の基本性能について見学会や初対面から施主へ提案することはほとんどない。なぜなら、いちばん重要なのはやはり“体感”だと考えているからだ。私たちが室内空間の中で心地よさやストレスを感じないということを考えたときに、数値が高いというだけでいい空間になるとは考えられない。「もちろん、もっと数値が良くなるような仕様で建てている家もありますが、私自身は化学合成した断熱材などで『0.2切った』とか『0.18です』という空間よりもシュタイコを吹いた0.3の方がいいなという風に感じています」

実際に、UA値が0.4前後の物件でも非常に快適だと施主が満足してくれていることも後押しになっている。現場でも自らの肌感でやっぱりいいなと手応えを感じていることも加えて、木という古くから大切にされてきた素材が生かされた木造建築と木繊維であるシュタイコとの相性の良さを施主に訴えている。そして、その提案の背景には山陰の夏がとても蒸し暑く過ごしづらい、ということがある。年々、最高気温が上昇していることも気掛かりで、家の性能を上げることで結露など湿度管理の重要性が増すことへの懸念もあるからだ。

石川県より移築改修した古民家（自邸）には大山を望むサウナ小屋も備わる

伝統構法とシュタイコを用いた平屋はモダンなインテリアで落ち着いた空間

温度ムラがないだけでなく湿度管理にも有効

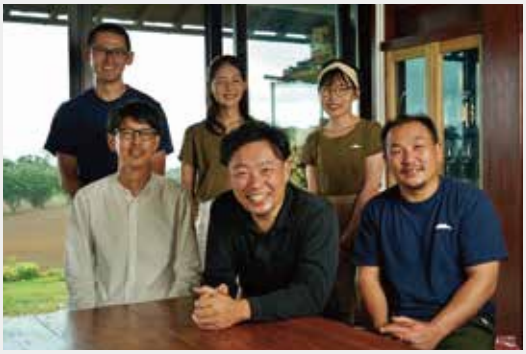
2016年に石川県より古民家を移築した自宅での冬の厳しさを痛感し、2022年の初頭に自らも断熱改修でシュタイコを採用した北村さん。断熱や気密性能を高めるほど熱交換器などの設備を使用した湿度管理が必要となり、機械に頼らざるをえないという悩ましい点が増える覚悟をしていた。特に冬場は薪ストーブを使用していることもあり、湿度がさらに低くなるのは仕方のないことだとも認識していた。しかし改修後、初めての冬を迎えた11月に温熱環境が改善していることに気付き、とても驚いたという。改修前の冬場は、本格的に薪ストーブが稼働する1～2月の間、やはり湿度は40％を切ったり日によって30％台になったりすることがあった。そのため、200年以上前の梁でもパキッと音が鳴り、そんなに年月が経った木でもまだ動くことや乾燥することに驚き、必然的に加湿器を入れて戻そうとしていた。ところが改修以降、湿度は50％前後を保っており、2022年の11月には薪ストーブを頻繁に焚いたなという日でも夜は48％ぐらいまでしか下がらなくなった。さらに翌朝には湿度が50％にまで戻り、同時に薪ストーブの余熱で21度前後の室温を保ち、外気温が10度を下回る日でもストーブを焚かずとも過ごせるくらいになった。

「まだ季節を一巡しただけですが、シュタイコの蓄熱性と吸放湿効果をこの冬で体感しました。断熱改修前で湿度や温度の変化があった昨年の今頃より、今年の方が過ごしやすく温熱環境が安定しています。**シュタイコが1年かけてこの場所に順応したというか、温度や湿度を経験し吸収したことで安定したといえばよいのでしょうか、どこまでこの現象が続くのかなと思って。**断熱材自体が吸放湿性を持ち湿度をコントロールできるのなら加湿器も不要になり、理想の住まいにまた一歩近づくのではないかと期待しています」と、木繊維断熱シュタイコの魅力を語る。こういった自然素材が持つ効果は言葉ではなかなか表現できない部分もあるが、防音や吸音についても静けさや空間の落ち着きが感じられ、木繊維断熱材ならではの〝優れた特徴〟ではないかとも付け加えた。住宅の新築や改修での施工実績が積み上がってきた今、北村さんが取り組むのは断熱を含めた店舗の改修物件。また、木との相性が抜群に良いシュタイコゼルの情報を、同じような考え方や悩みを持つ建築業者と共有している。

「周りにいる人は本質的に目指すところが一緒。その時の流行りではなく、家づくりのことを追求すると必然的に共通の目標が出てくるんだと思います。私もいい家づくりのために多くの人にとても良くしてもらったから、同じ悩みを持つ人と一緒に問題を解決してみんながハッピーになればいいなと思っています」

シュタイコが静謐な空間を創る

(*1) 気象庁調べ
(*2) とっとり健康省エネ住宅 NE-ST
https://www.pref.tottori.lg.jp/ne-st/


現在は２人のスタッフが加わり8人のチームで「住まい手と職人が一体となった建物」を建てる。

プロフィール

1979年生まれ。鳥取県・琴浦町出身。
大工の父が勤める工務店の仕事を幼少の頃から手伝う。
5年間、奈良で宮大工の修行をした後、地元へ帰り2010年に株式会社創伸を設立。
「ケミカルなものは一切使いたくない」という施主様の大規模な古民家再生工事を計画する過程で、もるくす建築社の佐藤氏に出会い、大きく影響を受ける。

株式会社創伸
代表取締役　北村 裕寿

株式会社 創伸 sou-shin
https://soushin-k.jp/

ウェビナー
開催情報

カリスマ木造エンジニア ヘルマン・ブルーマー氏 ウェビナー、スイスから生中継！

写真提供 Hermann Blumer

「欧州木造技術のトップランナーに聞く ～中大規模木造建築の現在と未来～ 」

イケダコーポレーションが協賛する「持続可能な建築」をテーマとしたスイス－日本サステナビリティ交流ウェビナー実行委員会（SJS）のオンラインセミナーが開催されます。

第5回は、木造建築の最先端をいくカリスマ木造エンジニアのヘルマン・ブルーマー氏が登壇。エコバウ建築ツアーでも視察先として訪れた「タメディア新本社」や「オメガ・スウォッチ新本社」など数多くのプロジェクトの建設実績を持ち、今回新たなプロジェクトやヴィジョンについて伺います。現地とオンラインでつなぎスイス在住のジャーナリスト滝川薫さんの解説にてお届けいたします。

木造建築が建築を変える

10年後の日本の未来の建築を見ることができます！

こんな方は必見!!

- 世界最先端の木造建築に興味がある
- 非住宅の中大規模木造建築に従事している
- 日本での木造建築の可能性を広げたい

日時 2023 2/16（木） 17:00▸18:30

参加費 1,000円

Zoomを使用し逐次通訳にて中継

主催：スイス－日本サステナビリティ交流ウェビナー実行委員会（SJS）
共催・協賛：株式会社イケダコーポレーション

詳細・お申し込み

https://peatix.com/event/3431783

（後日、アーカイブ配信あり）

【講師プロフィール】
ヘルマン・ブルーマー

1943年生まれ。スイスの木造エンジニア。大工の職業教育を受けた後、連邦工科大学での建設エンジニアを修了。実家の木造会社の経営に携わる側ら、多くの木質建材や構法を開発。クリエイティブな中大規模の現代木造建築に特化し、普及活動に献身。2005年に坂茂氏に出会った事に始まり、ヘレン＆ハルトといった世界的建築家のパートナーとして、著名な現代木造建築作品の実現を支える。現代木造技術大国のスイスにおけるパイオニアでありカリスマ的なエンジニア、発明家であり企業家。
www.hermann-blumer.ch

【講演内容】
- 木造エンジニア、ヘルマン・ブルーマー氏の仕事から見る現代木造建築の発展、代表事例
- 坂茂氏やヘレン＆ハルトといった世界的建築家とのコラボ
- 最新大型木造プロジェクトの紹介
- 現代木造建築の行く先、持続可能性、潜在性、ヴィジョンなど

新製品
情報

レイノス「天然粘土塗料 レームファルベ」の輸入販売を開始!!

＼ New ! ／

LEINOS Naturfarben

ドイツ発！「土に還る」循環型サスティナブル塗料

レイノス社（ドイツ）のレームファルベはドイツ・デュッセルドルフ周辺の高品質な白粘土が主成分のサスティナブルな塗料です。粘土が持つ「透湿性」「調湿性」「静電気防止」などの高機能により健康的な室内環境を保ちます。また、粘土特有の柔らかく高級感のある仕上がりは、リラックスできる空間を演出します。

詳細はHPよりご確認ください。

https://leinos.jp/

メディア掲載情報

日経アーキテクチュア

木繊維断熱材「シュタイコゼル」がSDGsに貢献する注目の建材として掲載されました。
特集「採用したい建材・設備メーカーランキング2022」

月刊建築知識

2022年12月号

リボス自然健康塗料「タヤ」の特徴と機能性をご紹介いただきました。

＼シュタイコ社セミナーへご参加ありがとうございました！／

世界最大の木繊維断熱材メーカーシュタイコ社から発信する

「ドイツ最新住宅断熱事情」

STEICO
engineered by nature

STEICO社 木材エンジニア
クラウス・ドリュッカー氏

2022年11月29日開催いたしましたシュタイコ社セミナー「ドイツ最新住宅断熱事情」へご参加いただき誠にありがとうございました。300名を超えるお申し込みがあり、当日も多数のご質問をいただき、大盛況の内に終えることができました。ドイツ、スイスと日本をリアルタイムでつなぎ、他ではなかなか知り得ない情報をお届けできたかと思います。
2023年もシュタイコ社セミナーをはじめ海外情報に関するセミナーを定期的に開催する予定ですので、皆様のご参加心よりお待ちしています！

参加者さまのご感想

●担当の方の自信溢れる紹介のおかげで、シュタイコ社の製品への信頼がさらに高まりました。とても素晴らしいセミナーでした。

●ドイツでの取り組みが、何十年も前から始まっていることが改めてわかりました。熱橋への考え方、断熱材の使い方の基本がとても良くわかりました。そして、木材が他の化学製品よりも燃えにくいこと、実験の様子を目の当たりにして肌で理解することができました。

●デュオドライの防水性能に興味がわきます。屋根下地としての強度面（屋根材を固定する釘やビスのきき具合や引張強度等）が気になります。

●限られた木材資源を最も無駄なく利用する手段だという講師の方の発言に感銘を受けました。目先ではなく数十年数百年先を見据えなければ。

編集後記

創伸さんが建てた家はパワースポットのような空間になるというお話しを伺い、木そのものの力だけでなく、作り手の魂が宿っているからなんだなと実感しました。また、その空間づくりにシュタイコが少なからず貢献している気がして嬉しくなりました。

木のプロフェッショナルとして、最高の住まいを建てるために研鑽を積まれ、尽力されている代表の姿勢に感動しました。シュタイコを選んでくださり、本国以上に活かし方や施工方法を試行錯誤しベストな状態で取り入れてくださっていることに改めて感謝するとともに、取材対応をしてくださった北村代表、竹内さんに心から御礼申し上げます。

Ikeda CORPORATION

ひとと環境にやさしい住まいづくり
株式会社イケダコーポレーション
ご注文・カタログのダウンロードはWEBから

【大阪本社】〒553-0003 大阪府大阪市福島区福島4丁目8-28 FJビル3F
0120-544-453　仙台・東京・名古屋・大阪・福岡　URL www.iskcorp.com

SNSで施工事例・イベント情報など更新しています

ご登録お願いします

インスタグラム @ikedacorporation
フェイスブック @ikeco.jp
ツイッター @iskcorp
YouTubeチャンネル イケダコーポレーション